

## 【慶良間海域保全連合会】

「オニヒトデと島の生活」中村 毅 (JOYJOY)

我が座間味の古老たちの話によると、サンゴ礁の敵であるオニは1940年頃もみかけたとのことである。

そのころのケラマ・座間味村は、ケラマガチュウ(ケラマカツオ節)の名声をほしいままにし、沖縄本島のみならず、内地にもその味の良さの評判をとどろかせていたようだ。カツオを釣る際の生き餌になるのは、スルルグァー(キビナゴ)やウフミ(キンメヤスカシ)なので、それらを網で捕獲する時にみかけたそうだが、誤って刺すこともなかったようなので、生息数としてはおそらくたいしたものではなく、自然の一部の生物として、ごく当たり前になっていたと思われる。ちなみにオニヒトデのことを方言でトォーガチチャー(唐のヒトデ)と呼んでいて、悪いものや珍しいものは外からやって来たものと考えていた節がありありとわかってしまうのはご愛嬌。

さて、オニの大量発生の原因は、いまだ不明確だが、ここ座間味村では、1974年頃大発生し、島の周りのミドリイシサンゴ類は全てと言っていいくらい食べつくされ、唯一、クバ島のリュウキュウキッカサンゴのみが生き残ったことを記憶している。また、これらの大発生がみられた年と前後して、カツオの餌とりが島のまわりだけではどうしようもなくなり、カツオ船の組合員たちが難儀したことも記憶に新しい。

今、座間味村では、ダイビングが盛んに楽しまれてるが、ナントカ根・・・とかいってダイバーが楽しんでいる根の大半は、かつてのカツオの餌とりの時に利用されていた、小魚たちの付く根であり先祖たちが大切に引き継いでくれた場所でもある。

現在、座間味村では、1995年頃からオニ退治のボランティア活動が行われ、サンゴ礁の管理保護に大いに貢献していて、とくにここ数年の異常発生には同じ地球上の生物同士の闘いのように踏ん張っている。2002年と2003年の合計では、駆除数150,512匹、延べ人数3,902名、延べ日数347日、延べ使用タンク5,030本、延べ使用船舶558隻となっており、夏、冬とわず仕事の合間をぬってオニ退治にでかけている。

つい10年ほど前までは、オニのいる所の全地域をできるだけくまなく潜り獲っていたが、広いサンゴ礁は、人的チカラではカバーできないので、結果的には、あらゆる水域でオニの被害にあってしまったとの反省から、最重要保全区域を決めその水域のサンゴを死守するようにしている。具体的には、ミドリイシサンゴの種類の豊富な、また、天候にあまり左右されなく、いつでもすぐに駆除作業ができる島の周りの地先(座間味村では里海とも呼ぶ)の4ヶ所を絞込みかつ、週にかならず1回以上は同一ポイントのパトロールを行っている。

文献によると、オニの生息は1ha(100m×100m)で30匹以上は尋常ではないということから、4ヶ所の最重要保全区域の現状は、80匹とか120匹超をいまだに捕獲することなので、まったくもって油断はできない。30匹以下の生息でサンゴ礁とうまく共存してくれる日を待っているのだが・・・

ここ、数年前からエコツーリズムということから、カヌーやスキンドイビングのツアーが多くなってきた。島で生計をたてる者として大変うれしく思う反面、大変な責任を感じる。それは、島の里海である地先が、もう、人が管理しなくてはならないほどに、種々の要因によりその健全な存在がおびやかされつつあることに・・・オニは種々の要因の凝縮であるかもしれない。

いま座間味村では、海の環境を楽しむ時に、同一ポイントの利用を月に何回にしようとか、ボートは4隻までですよ!とかの啓蒙活動を実行している。日本でスクーバがレジャーとして華になったのが1980年の頃・・・、座間味村でスクーバで経済活動しているわれわれの、環境に対する責任は大きい。いつも水域を見ているのはわれわれだし、その変化にしらんぷりを決め込むのは、島を捨てるに等しく、先祖にたいしてかつ、子孫にたいしてこれ以上の裏切りはないのだから。<http://www.cosmos.ne.jp/joyjoy/coram.htm>

## 【恩納村漁協】

恩納村漁協の漁場保全の取り組みのなかで注目されるのは、漁業は海の恵みを受けて成り立つ産業であり、漁場環境の保全は漁業者及び漁協の責務であるという基本的な姿勢である。それは、沿岸域の利用については漁協が調整機能をもつということであり、そのために、漁協の作成した計画について一般にも公開して情報の共有化につとめている。

計画策定にあたっては、関係する漁業者を全員集めて合議でおこなっている。たとえば採貝やモズクというように、各部会での話し合いを重視し、数十回と会合をもち、出席者は延べ 200 人となっている。取り決めは多数決ではなく全会一致を基本とする。というのも、会議は相当の時間と労力を要するが、全会一致でつくったものは全員が守ることになるからである。

資源管理とは漁業者の活動の基本をなすもので、自分たちだけよければよい、という考えを漁業者が捨て去ることが重要である。恩納村では、違反した人が利益を得るということはなくすようにしている。全会一致で協議したものは必ず守らせるようにし、守れないものはルールとして決めないようにしている。遊漁との関係は、漁場を多面的に利用し、重なり合って使用する、という考え方をとっている。」（「サンゴ礁の保全と利用：理解と対話の新たな枠組み―第一回サンゴ礁保全関係者意見交換会―」（亜熱帯総合研究所主催、2002 年 3 月 16 日開催）における恩納村漁協職員（指導員）比嘉義視氏の報告「恩納村の漁場管理計画」から）。